
ポケットモンスター—Way of Recollect—

雪熊 & 星虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター―Way of Recollect―

【Nコード】

N1918Y

【作者名】

雪熊&星虎

【あらすじ】

ここは、ポケモンたちが現代の人間たちと同じ様に文明を持ち、暮らしている世界。

白銀学園一年生のポチエナのルキとガーディのレッカは“クロノシテイ”別名、学生の街と呼ばれる場所で人助けを主な活動としたギルドを創設する。

数々の依頼を通し、様々な《壁》ぶち当たりながらも彼らは前へ、前へと歩き続ける。

これは、そんな彼らの壁を超える物語りの記録である。

chapter[∞] - 道化師は狂い躍って - (前書き)

はじめまして。雪熊&星虎の星虎です。

いきなりで失礼しますが、少々警告をしておきます。

本作品はR - 15指定ですので、少なくとも中学生以下の閲覧はご遠慮ください。

また、残酷な描写があるので、苦手な方は見ないことをおすすめします。

上記の点で、何か問題が発生しても、作者どもども、一切の責任を負いませんので、ご了承ください。

それでは、少し長くなってしまいましたが「chapter[∞] - 道化師は狂い躍って - 」どうぞ。

chapter ∞ - 道化師は狂い躍って -

そこにあつたのは、小さな村だった。

ほんの数時間前までは、いつも通り長閑な風景が広がり、心地よい風が吹き抜け、子供たちの楽しそうな笑い声が響いていた。

これからも、この先何年も同じ光景が広がり、同じ様な時を過ごしていたのだろう。

——あの事件さえ起きなかったら。

長閑だった村はこの数十分の間に、全てが変わった。

建物は一つ残らず燃え盛り、微かに吹く風は血の臭いを運び、静かな村に響くのは木々や建物の燃える音。

希望が芽吹く村は、たった数十分で絶望が徘徊する場所へと変わってしまった。

「けほっ……母さん……どこお……？」

変わり果てた村の中を、一人の子供のポケモンが痛々しそうに足を引きずって歩く。

体中血だらけだった。勿論少年の血もあつたが、それ以上に彼の体に付着する血は他人の血。

「みんな……どこ？ いるなら、返事をしてよ……！」

もう、どれだけ歩いたろう？

一時間は歩いた気がした。実際はまだ十分もたっていないのに。

「お母さん……お父さん……××……」

泣きたかった、でも泣かなかった。

本当は恐くて、寂しくて、痛くて、おかしくなりそう。

それでも希望は捨てられなかった。

きつとみんな大丈夫だ。生きてる、またあの楽しい日々に戻る。まだ年端もいかない少年には、そう思うしかなかった。

そう思う事で、自分を守っていた。そうじゃないと、壊れてしま
うから。

「……………?」

不意に、少年は立ち止まる。

視界の隅に何かが映った気がした。炎でもない、建物でもない、
なにか光るものを。

その方向を見ると道端の真ん中に一つのポケットが落ちていた。

少年は見覚えがあった。見覚えしかなかった。

「コレ……は……っ××!？」

彼の眼の色が変わり、ある名を叫んだ。

その名前のポケモンはこのポケットの持ち主であり。同時に、少
年の大切な人である。

僅かながらも、表情に笑顔が戻る。今まで自分を覆っていた不安
が払拭されていくのが感じ取れた。

それと同時に湧き上がる『会いたい』という感情。

「××! ××!? いるんでしょ!？」

少年はロケットを握って必死になって探した。
熱を帯びた煙を吸い込み過ぎてうまく喋れもしない喉で叫んで、
ガラスの破片や尖った木を踏んで出来た傷跡だらけの足で走って、
それだけ、大切な人だから。大好きな人だから。
自分が傷つくことも厭わずに。

……そして、見つけた。

「……××？ ×——」

見つけてしまった。

ボロボロで、自分よりも血に染まった大切な人を。
右手が根元から無かった。腹に円形の大きな穴が、ぽっかりと開
いていた。

距離はあったが、その場でもよくわかった。

もう、死んでいる。

こんどこそ、完全に希望は打ち砕かれた。

彼が頑なに認めようとしなかった自分以外の生存者がいないとい
うのも。あっさり認めた。

ロケットが手からこぼれ落ちる

「何で？……何で死んだの？」

答えが帰ってくるはずのない問い。

「何で、さ。あんなに、笑ってたのに」

不思議と悲しくはなかった。それ位、心が麻痺していたのかもし

れない。

あるいは、もう既に大切な人ではなくなっていたからか。
その代わり、彼の中で一つの感情が渦巻き始める。

小さなモノだったが、まるで台風のように徐々に大きくなっていく
その感情。

——…誰の所為？

——誰の所為で××は死んだ？

怒りにも似ていたが、違う。

「そうだ、あいつらだ。みんな死んだのは、あいつらの所為だ」

現に、少年の顔には笑顔が満ちているのだから。

これからどうするかは既に決まっていた。
もう、迷わなかった。

「ハ、ハハ」

「アハハ、アハハハハハハハハハハハハハハハハ——！！！！！！」

口を吐いて出たのは、笑い。

まるで道化師じエロの様な歪んだ笑顔。

ひとしきり、彼は笑って、彼は呟く。

「復讐だ」

その“狂気”に、少年は酔いしれていた。

chapter ∞ - 道化師は狂い躍って - (後書き)

どもども、雪熊&星虎の雪熊です。

初っぱなかなり鬱な話でしたね、すいません(´・ω・´)

でも安心してください。次回からおもいきりコメディ路線になりますのでww

ここまで読んでいただきありがとうございました。

また次の話でお会いしましょう。

では、

chapter? バカと祭りと転校生(前書き)

どもども！ 雪熊でっす

あ、今回から前書き、後書きは自分が担当しますのでよろしく願います。

感想コメ返はランダムっす。

……え？ サブタイが某ラノベっぽいって？ ぶっちゃけまんまですw

さてさて、今回は知ってる人は知っているあのキャラが出てくるよ！
ってあらずじ見りゃ分かりますがw

正直色々詰め込みましたので全体的にグツダグツダですが、記念すべき第一話、どうぞ！

chapter? バカと祭りと転校生

「復讐だ」

急に立ち上がったコイツは、わなわなと震えながらそう言った。反対側に座っていた俺は「いきなり何を言い出すかと思えば」といった表情で呆れていたが、コイツにはどうでもいいらしい。

「アイツに、復讐してやるんだあーっ!!」

「目の前に広がるこの悲惨な状況を作り出した先生を僕の良心が許すわけにはいかない!」なんてなに格好つけた台詞言ってるんだか

「あーハイハイ。取り敢えずお前がしなきゃいけないのは復讐じゃなくて」

俺は脇からプリントの束を取り出し、それを二人の間のデスクの上にドサリと置いた。

「……復習、な」

はつきりそう言つて。

目の前のポチエナは信じられないと言った表情で俺を見つめる。その顔はどこか死刑宣告を受けた囚人にも見えなくもない。

「そんな!? ラルまで先生の肩を持つ!? どうしてだよ!!」

「あー……だって俺」

「いや、言つな。きつと僕らは戦う運命にあつたんだね」

「デメエが聞いたんだろうがッ……! 何をちよつとおいしい展開

に持ってこうとしてんだよ!？」

「そうか、きつと洗脳されているんだね! くそっ! まさか先生がそんな卑怯な手を使って来るなんて……!」

おいおい、凄いこと考え始めたぞ、コイツ。

「ラルを元に戻すにはもう戦うしか残ってないのか……でも安心して! 僕がきつと君を元に戻してみせる!」

こう言つの何て言ったつけ。ああそうだ、中二病だ。ゲームのやりすぎだな。後で没収しとこう。

「少し落ちつ」

「死ねえええええ!」

「とても助ける時のセリフに聞こえないんだが!」

どうしてコイツは補習で出された課題やってるだけでこんなに狂ってるんだ? 手伝ってやってる俺に襲いかかってくるし。

こんなんじゃないつまでたつても進展しないので、取り敢えず俺に殴りかかろうとするこの馬鹿を教室の床に沈め、打開策を考え始める。

そして俺が導き出した答えは。

「……そうか、これだ!」

「う、ううん……僕は何をしていたんだっけ?」

俺が名案を考え付いたその時、丁度良く目を覚ました馬鹿。

「ルキ、今すぐこの番号に電話しろ」

「へ? 何で?」

俺はとある電話番号を書いたメモを渡してこう言った。
コイツに今必要なのは。

「安心しろ。腕の良さは保障してやる」

精神科の手術だ。それしかこの馬鹿が治る見込みは無い。

俺の名前はラルフ。

白銀学園高等部1年Bクラスに所属しているザングースだ。
そして俺の目の前にいるのが馬鹿……もといポチエナの馬鹿だ。

「あつれえー？ いまさらつと馬鹿にされた気がするぞ」

「気の所為だろ？ 馬鹿」

「あつ！ ほら馬鹿にしてるじゃないか！」

一応真面目に答えておこう。このポチエナの名はルキ。
同じクラスの仲間で、中学の時から付き合い。ルキによると俺
達は親友らしい。

体育と音楽以外の成績は常に2。補習、追試は常連さん。

今日も期末テストでこの馬鹿は見事赤点を取り、例のごとく補習
で数学の宿題が出されたとかで渋々俺が手伝ってやってる。

いや俺も嫌なんだけどさ、ルキはおるか、先生まで手伝ってやれ
って言うんだぜ？ ありえねーっつの。

ま、こんな馬鹿でも得意なもんはある。

コイツ、バトルだけはかなり巧いんだ。それこそ馬鹿みたいに、
な。

……え？ 何でルキの説明は詳しいのに俺の説明が雑なのかって

？ そりゃそうだろ、だって。

——いや、これはどうでもいいか。

「やっと終わった——！！」

さっきルキが暴走してから小一時間が経ったところ。何とか課題を片付けたルキは大きく伸びをして叫んだ。

俺も何とも言えない一種の解放感に包まれながらも、携帯で時間を確認する。

「つてもう一時じゃねえか。結構時間かかったな」

「ホントだねー。あつ大会って何時でどこでだっけ？」

「覚えてねーのかよ。今朝も言っただろ？ 場所は第三体育館で、エントリー終了は二時くらいだったと思うけど、なるべく早く行った方が良いだろ。今のうち課題、先生に出してこいよ」

そう答えると、ルキは「わかったー！ 僕の荷物持って先行っていいよー」って言い残して、尻尾をハタハタと振りながら教室を出ていった。

「って、ちゃっかり俺に荷物預けてるし」

しょうがない馬鹿だなと苦笑しつつも、ルキの鞆を持って俺は教室を後にした。

学校の校舎を出た瞬間。俺は灼熱とも言える熱気に包まれた。ものの数分で汗が噴き出し、Yシャツの中の下着と体毛は汗でべつとりと張り付いて不快感が纏わりついている。

まあ、それもその筈。今の季節は太陽がフルパワーで活動する一年で最も暑い真夏。幾らこの街が最先端技術の塊で出来ていようと、気温は変えようがない。

さっさとクーラーのある場所へ行こうと、足を速めた時。

「……あれ……」

ふと、校門の方にいる誰かが俺を見ているのに気づいた。

校門へ顔を向けると、オレンジ色の体毛のガーディが確かに俺を見つめていた。

我ながらよく気付いたと思う。だって、あのガーディがいる校門までは五〇m近く離れているし。それに何より、俺は校門とはまったく間逆の方向へと歩いていたのだから。

目が合うと、ガーディは俺に微笑み（多分。遠くてはつきりとは見えなかった）急ぎ足で俺の方へと走りだす。

服装、顔立ちから性別は男。歳は多分俺と同じくらいだと思うガーディは、爽やかな表情で俺に話しかけてきた。

「こんにちは！」

「お、おお」

初対面、ましてや突然話しかけられた俺はどう返したらいいかわからず、随分歯切れの悪い返事になってしまったが、ガーディは気にしていないらしい。

「白銀学園の学生さんですか？」

「ん、そうだけど……っていうかお前誰？」

言ってから自分の間違いに気づく。

しまった、幾らなんでもこれじゃかなり失礼な奴のセリフじゃないか。

「すみません。まだ名乗っていませんでしたね」

ところが彼は気を悪くした様子もなく、それどころか謝罪をして自分の名を告げた。

「はじめまして、僕の名前はレッカ。カントーの真白学園から来ました」

「……てゆーと」

レッカと会ってから数分。外は暑いし、俺が行こうと思っていた白銀学園の第三体育館に取り敢えずレッカと一緒に行く事になった。第三体育館への道すがら、何も話さないのも何なので、お互いに自己紹介を簡単に行った。

「レッカは俺とタメで」

「はい」

「この学校へ転校してきた所謂転校生で」

「そうですね」

「しかし、その実態はとある滅亡した王国の騎士団に所属していた“最後の聖騎士”と謳われ掃除洗濯殺戮料理を極めたスーパーメイドさんだった……」

「まあそんな感じですね……」

しばしの沈黙。

「っえ!？」

「あっえっ……違いますよ!？」

手を顔の前でぶんぶんと振って否定するレッカ。

「いやわかつてつけど。意外と鈍いなー」

「鈍いつていうか……前の学校の友達にラルフ君と同じザングースがいて、彼があんまり冗談言わない人だったんで」
ボケモン

レッカは苦笑しつつも、どこか懐かしそうな顔を浮かべてそう言った。

「……ふーん。仲良かったのか？」

「そうですね。あっちで出来たはじめての友達の一人でしたし」

レッカとそのザングースはかなり仲が良かったんだろう。傍から見てても、そんな感じが伝わってくる。

友達の一人ってことは、同じくらい仲のいいヤツがいるのかもしれないな。

「……だから、絶対……」

ぼそつと、レッカが呟いた様な気がしたが、俺にはよく聞き取れなかった。

「ん？ なん……」

『ル————！！！！』

「……ていいタイミングでやってくんのかね、あの馬鹿は」

俺がレツカに問いかけようとした言葉は、聞いただけで誰かわか
つてしまう馬鹿な声の所為で遮られてしまった。

「お友達ですか？」とレツカが訊いてきたので、「どうしようも
ない馬鹿だよ」と答えると何故か笑われた。

「いやー待たせてゴメン、先生が放してくんなくてさあ！ おっ
誰？ そのガーディ君！！」

「……騒がしいな」

「でも、ラルフさん嬉しそうですねー」

「どこが？」

「尻尾、微かに揺れてますよ？」

「……風だ」

「なに話してんのー！？ 僕も混ぜてよー！」

コイツがきて早々、耳栓が欲しくなった。……あと、別に俺は嬉
しくない。

ルキとレツカがそれぞれ自己紹介を終えたあと、程なくして第三
体育館に俺達は着いた。

白銀学園第三体育館。通称バトルアリーナの正面入り口前の広場
には多くの生徒で溢れかえっていて、それは他校の生徒も例外じゃ
なかった。

「うわあ、^{ポケモン}人でごった返してますね……」

「あっ！？ 屋台だ！ 今年は屋台もやるのか」

「蒸し暑い」

その状況を見て、それぞれの感想を述べる俺達。

「あの……訊いてなかったんですけど、ここで何かイベントでもあるんですか？」

レッカはおずおずと訊いてきた。それにルキが信じられないと言った顔で応じる。

「知らないの！？　今日は夏の始まりを祝う“夏桜祭”だよ！？」
「かおうさい？」

「まあ平たく言うと、『学生の夏は一度きり！　今年も夏休みを満喫しよう！　ただし夏休みの課題はしっかりやらないと後で地獄を見るよ』をモットーにしたこころじゃ恒例のお祭りだな」

「随分学生をメインにしたお祭りですね。それに学生の夏って別に一回じゃないと思うんですけど」

「ま、この街は大体が学生だしな。学生の夏はその時の学年とかによつて意味合いが違ってくるらしい」

正直、去年と何ら変わらない気もするが。

「んでんで！　夏桜祭メインイベントのランダムバトルがこの後にあるんだよ！」

「ランダムバトルってなんですか？」

楽しそうに言う馬鹿と首を傾げるレッカ。

「そんな難しいもんじゃないぜ？　大会のルールは割とシンプルだし、俺とルキも出るんだ」

「そうなんですか？ 楽しそうですね」

「何ならお前も出てみるか？ 他校の生徒でも参加条件が学生であることだからな」

「おっいーね、それ！ レッカもやるよね？ よっしゃ決定♪」

「……僕に拒否権は……？」

「諦めろ」

そんなものあるわけじゃないか。

「……あう」

「てかさ、レッカ」

「なんですか？」

体育館内で受付を済ませたあと、ルキが思い出した様にレッカに問いかけた。

「いつまで敬語使ってたの？」

確かに、それは俺も気になってた。いくら会って数分って言ってもタメに敬語使うか？ 普通。

ま、レッカの場合は遠慮がちな面もあるみたいだし、しょうがないとは思ってたけど。

唐突に切り出された質問に、レッカは戸惑った表情を浮かべた。

「えっと、まだ会って間もないですし……」

「何言ってるのさ、僕らもう親友っしょ？」

うわ、ド直球。^{ストレート} しかも“親友”と来たか。

「えええ！？ 親友ってそんな……！」

「あれ？ 違うの？ 僕はもう親友になっていたものだとばかり……だよねえ、ラル？」

流石に動揺を隠せてない、ってか赤面してるレツカを余所に、ルキは心の底から首を傾げて、頭の上でハテナマークを盛大に躍らせている。

何て言うか、すげーコイツらしい。

「……アツハハハハ！！ だなあ！」

「ラル？」

「ラルフさん？」

気付けば、俺は大声で笑っていた。可笑しくて、たまらない。

周りの奇異の視線なんて気になんなかった。頭の中にあるのはこの馬鹿の馬鹿でサイコーに格好いい発言だけ。

俺はレツカの肩を思い切り叩いて言った。

「おーレツカ！ お前今から敬語禁止な！」

「えっあっえっ？ 何で！？ ……ですか？」

「そーそー！ それと、その優等生キャラもやめなよ！ しょーじき似合わないからっ」

「にあっ！？ わ、悪かったね！ 似合わなくて……！ 別に優等生キャラ作ってないし！」

「できんじゃん、タメ口」

「……ッ！ あーもうっ！！ 君らホントにあの馬鹿どもにそっくりだよ……！」

レツカは顔を真っ赤にして叫んでいた。それでも表情は笑顔に満ち溢れていて、これがレツカの素なんだろうな。

「……さてと、そろそろ開会式始まるし、行こうぜ」

「えっ！？ もうそんな時間！？ まだ屋台回ってないよ」

先程の楽しそうな顔から一転。ルキは今になって焦り出した。

「でももうすぐ始まっちゃうよ？ 後で出番じゃない時にしなよ」
「そうだぞー早く行かないと失格になるかもしれないねーしなあ？」

真面目に諭すレツカと少しおちよくったように言う俺。脇腹をレツカにつつかれたけど敢えて無視。

実際は失格になる事はないんだけど、そんなことこの馬鹿は知らないだろ。現にすっごい悩んでるし。

結局こいつは「すぐに戻ってくる！」と言い残し、ダッシュでこの場を後にした。

「んじゃ、俺達は一足先に行ってますか」

「待たなくて良いの？」

「めんどい」

そう一蹴したつもりだったが、レツカからは思いもよらぬ返事が返ってきた。

「とか言って、本当はルキが戻ってきた時に「待っててくれたの！？」
「ありがとー！」って言われるのが恥ずかしいだけだったりして」

「……五月蠅いな」

「凶星……か」

コラそこ、優しげな表情でこっち見んな。

「ってーかアイツの場合はド直球^{ストレート}に臭い事を惜しげもなく言い放つからこっちが赤面せずにいられないんだッての！ 自覚ないし！」
「確かに……あれで天然だったら性質^{タチ}が悪すぎる」

レッカもさっきの「僕らもう親友っしょ？」ってルキの言葉で身に染みているんだろう。

「はあ、もう考えんの止めようぜ。何か思いだしただけで恥ずかしくなってきた」

「……同感。行こっか」

開会式の場所。つまり、これから戦闘が繰り広げられるであろうバトルフィールドのゲートの下を俺とレッカは歩く。そして、あと少しでゲートを通り終えようとした時、俺は立ち止まり、レッカに手を差し出す。

レッカは最初こそキョトンとしていたが、すぐに俺の手を握り。

「えっと、正々堂々と戦おう」

「違うよ。いや間違っちゃいねーけど、そうじゃなくて」

「じゃあ、何？」

「……これからもヨロシクなって意味だよ……」

やばい、恥ずかしすぎて死ぬ。

やっとのことで絞りだした声は、消え入るように小さかったが、レッカには通じたらしい。

「うん。よろしくっ」

と出会ったときと同じ様に爽やかさ全開の声で俺に微笑んだ。

おまけ

「つーか何でこんな恥ずい事を真顔でやってのけんだよ、あの馬鹿は……！」

「それがルキの良いところなんだろうけど、聞いてる側としては溜まったもんじゃないよね」

「ハア……本当にお人好しだな（ね）」

（えっと、りんご飴にたこ焼き、焼きそば、綿飴は買ったたる……まだ買っていないのは……カキ氷だ！！ あーでもそろそろ行かなきゃ。……うーんカキ氷くらいはあの二人にも買ってってあげようかな、だとしたら二人は何味が良いかな？ ……ってか炎タイプってカキ氷食べれたっけ？）

「……………ま、いつか、おお、お汁粉味のカキ氷か。レッカのはこれにしょーっと。すいません！ このお汁粉味とタバスコ味とイチゴ味、一つずつくださーい」

「どうしてだろう？ もの凄い嫌な予感がする」
「奇遇だな。俺も何故か水を大量に用意しておいた方が良い気がしてきた」

chapter? バカと祭りと転校生（後書き）

という訳で、自分こと雪熊が依然書いていた「Wonderful days」より、主人公のレツカがこの小説でも主人公の一人として活躍します。

てな訳で、主人公のお二人、簡単に自己紹介！

ルキ「うん、おっけー！ 僕はポチエナのルキだよっヨロシクね」
レツカ「はじめまして、ガーディのレツカです」

ちなみにこの話の一人称を務めてくれたのはザングースのラルフ君でしたー

ルキ「扱い雑だなあ」

序章の間はラルフ視点で物語りが進んでいきます。

レツカについてとかは後の活動報告でお知らせするかもです。

ではでは、今回はこの辺で。次回は今月中に投稿できればいい方だと思ってくださいww

ルキ「またね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1918y/>

ポケットモンスター—Way of Recollect—

2011年11月4日08時17分発行